

4-1-7-4 育児心理科

1.概要、特色

1.1 子どもの心理状態や精神発達に関する問題に関する評価・支援

当科では、何らかの精神的な問題を生じている子どもや、親が育てにくさを感じる子どもについて、児童精神医学的立場から、精神発達や精神状態の評価を行っている。たとえば、身体的疾患の治療中に、子どもの心理状態に変化が生じることもあるし、精神発達の遅れや偏りを心配される場合もあり、多角的な判断が必要である。また、親が育てにくさを感じる時、子どもの精神発達や心理状態に何らかの問題が生じていることも少なくはない。さらに、心的外傷を負う子どもの評価・治療を行うことができる。これらの評価の後には、子ども自身への治療的介入、親へのガイダンス、発達心理科や思春期心理科との連携により、養育の援助や治療の幅を広げている。

1.2 親の育児不安や産後の育児困難に対する治療・支援

親の育児への不安は、上記に示したような子どもの何らかの問題がある場合はもとより、たとえ健康な子どもの育児であっても、親自身のライフサイクル上の要因や、家族関係、親自身の精神状態などさまざまな問題が絡み合って生じうる。当科では、これらについて心理社会的視点から判断し、現実的な支援を講じる。特に、親の精神医学的障害については親自身の治療を行っている医療機関や保健機関などと連携して、精神的に問題を抱えている親の育児に関する支援を行っている。たとえば、出産後にうつ病や躁状態あるいは神経症の悪化を呈する場合があるが、子育てへの影響が大きい場合には、そのような精神医学的問題を抱える親が育児をする上で必要な方策を検討して支援する。この場合、周産期診療部を代表とする他の診療各科やケースワーカーとの連携を適宜行っている。

1.3 子どもの不適切な養育に関する評価・判断・心理社会的支援

当科では、虐待を含む不適切な養育への対応を随時行っている。身体的治療を求めて受診する症例においても身体症状自体が不適切な養育の結果である場合があるし、不適切な養育の結果精神面や行動上の問題を生じている子どももある。その問題に気づく者は、親自身である場合もあるし、身体的診察をした医師である場合、地域の保健師、児童福祉司などの場合もあるが、各経路から依頼を受けて適宜評価・介入している。これらの対応には、総合的かつ迅速な判断と実行力を要し、院内各科、ケースワーカーとの連携が重要であり、しばしば児童相談所や保健所などとの協議を行っている。

2.診療活動

2.1 入院診療

今年度、当科の入院患者への関わりは殆どが他科とのリエゾン（連携）であった。身体的疾患の治療で入院している子どもの精神的変化への対応はもとより、身体的精査の結果異常なく症状は精神的なものと判断された場合の治療へのかかわり、周産期医療を受けている親への精神的問題への治療・支援、子どもあるいは親の治療中のストレスへの対応などが含まれている。

2.2 外来診療

外来においては、子どもの精神的問題に関する診療と、親の育児不安への対応ならびに産後の支援などをおこなった。子ども自身が受診できない状況でも、親へのガイダンスの形態で相談に乗っており、受診経路は親からのみならず、他科よりの依頼にて受診にいたるケースも少なくない。特に周産期診療部との連携では、なんらかの精神的不安定をかかえた妊婦の出産へ向けてのサポートも行った。

主診断の診断分類

(2003年7月 - 2004年3月の9ヶ月間)

ICDコード	n
F1:精神作用物質使用による精神および行動の障害	1
F2:精神分裂病、分裂性障害および妄想性障害	2
F3:気分(感情)障害	9
F4:神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	51
F5:生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	4
F6:成人の人格および行動の障害	3
F7:精神遅滞	5
F8:心理的発達の障害	14
F9:小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	31
T7:中毒	1
Z6:環境に関連する問題	3
不明	1
合計	125

年齢分布

(2003年7月 - 2004年3月)

年齢グループ	n
乳児	3
幼児	17
小学校低学年	30
小学校高学年	23
中学生	15
高校生以上	37
合計	125

性別	n
男	50
女	75
合計	125

3. 研究活動

今年度当科では、以下の研究活動を行った。

成育医療研究委託費「EBMに基づく分娩の安全性と快適性の確立に関する研究(主任研究者加藤忠明)」の分担研究として、「お産の満足度と母親の心理ならびに母子関係に関する研究」子どもの精神的問題に関与する出産・育児における要因についての調査
厚生科学研究(子ども家庭総合研究)費「母親とともに家庭内暴力被害を受けた子どもへの心理的支援のための調査(主任研究者金吉晴)」の分担研究として「児童精神科臨床における Domestic Violence の実態と家族の病理」